

# Card Seek ブロマガ(Vol.4)

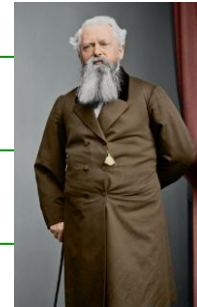
2012 年 2 月 28 日 号

「モノは心で生きる」

小河 俊 紀

幕末に日本を訪れた外国人の多くは「日本の庶民は、貧しくても皆幸福そうだ」という趣旨の感想を残している。

たとえば、1856年に来日した米国初代公使タウンゼント・ハリスは「彼ら（日本人）は皆よく肥え、



身なりもよく、幸福そうである。一見したところ、富者も貧者もない—これが恐らく人民の本当の幸福というものだろう。私は時として、日本を開国して外国の影響を受けさせることが、果たしてこの人々の普遍的な幸福を増進する所以であるか、どうか、疑わしくなる。私は、質素と正直の黄金時代を、いずれの他の国におけるよりも、より多く日本において見出す。」と日本滞在記に書き記している。

物質的には貧しくとも、当時の日本には、

欧米のスラムのような孤独感・絶望感がなく、

意外に穏やかで幸福な社会だったらしい。

終戦直後に生まれ、モノがない時代に幼少

期を過ごした私たち団塊世代は、3C（カー

クター、カラーTV）といった高額商品取

得に幸福を求め、ひたすら働いてきた。しか

し、モノの豊富さと幸福感は一致しない、と

思い知る私事体験が最近あった。

私の次女は、3年前から一人暮らしをして

きたが、昨年末でアパートを引き払い、我が

家に戻ることとなった。

ところが、一人暮らしに備えて新たに買い

揃えた電化製品や家具等を収容する空きスペ

ースが自宅にない。

もともと4LDK設計で、広くもないが、

狭くもない一戸建だ。娘二人には幼少期から

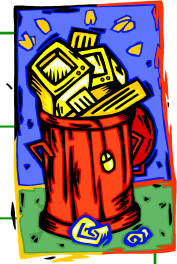
一部屋ずつ与えてあった。成人後、それぞれ

自活した際に、新しい生活用品を買い揃えた

ため、子供部屋は当時の家具や衣類や文具等

がそのまま満杯だ。

困り果てた結果、緊急避難策として、  
近所の貸倉庫を短期レンタルすること  
になった。二人の部屋の衣類・家具等  
で未使用なものを極力廃棄し、必要最小限を  
一旦倉庫に収容した上で、徐々に自宅内の適  
所に再配置する“断捨離作戦”を実行した。



家族全員で部屋を整理していく連帯感が作  
業に拍車をかけ、二つの部屋は1ヶ月で見事  
空っぽになった。

結果、壁や床がむき出しになり、25年前  
の新築当時さながらの清々しささえ漂うよう  
になった。リフォームした如く。



この時、全員が思わず漏らした  
言葉が、「モノが少ない幸福感て  
あるのね・・・」。

もちろん、娘たちは本当に大切なモノは保  
存している。東日本大震災で突然すべての財  
産を失われた被災者の方々には不謹慎な事例  
だったかもしれないが、「モノは、心によっ  
て生きる」との教訓を得た思いがします。